

研究ノート

# JENESYS2017

## インド学生と文芸学部学生の交流会報告書

深澤 愛、松本 ユキ、大田垣 仁、藤井 弘章

### 1. はじめに

2017年11月30日、文芸学部生20名とインドから来日した大学生19名との交流会が行われた。本稿は、この交流会の経緯と成果、残された課題を記録することで、今後の文芸学部生の国際交流イベント開催に資することを目的としている。

交流会は、外務省が行っている JENESYS2017 プログラムの一環として行われた。JENESYS プログラムとは、日本政府が推進している国際交流事業であり、人的交流を通じて対日理解を促進することを主な目的としている。

近畿大学では、2017年11月に国際学部が韓国訪日団を、続いて文芸学部がインド訪日団を受け入れた。文芸学部受け入れの最大の特色は、複数の学科・専攻の学生がチームを組んで交流会準備および当日の対応にあたった点にある。本稿では、特にこの点に注目して記したい。

本稿の構成は次の通りである（（ ）内は執筆者）。2では、交流会開催までの経緯（深澤）、3では交流会当日の様子をまとめた（松本・深澤）。4では、学科・専攻別に行った参加学生へのアンケートやインタビューをもとに学びの成果や問題点をまとめた。4.1は文学科日本文学専攻と英語コミュニケーション学科（大田垣）、4.2は文学科英語英米文学専攻（松本）、4.3は文化・歴史学科（藤井）の報告である。5で全体のまとめと、今後の課題を述べる。本稿末尾には、資料として学生へのアンケート・インタビューの結果を掲げる。

### 2. 交流会の開催まで

#### 2.1. 開催の経緯

2017年10月初旬、一般財団法人日本国際協力センター（Japan International Cooperation Center。以下 JICE）より、近畿大学インターナショナルセンターに

以下の内容の打診があった。

(1) JICE からの打診の要点

- a) ENESYS2017 招へいプログラム（対象国：インド、テーマ（文化）日本語コミュニケーション・日本文化交流）の1イベントとして近畿大学を訪問したい。
- b) 希望する訪問プログラムの例は、校内案内ツアー、授業参加、ディスカッション、日本文化体験など。
- c) 訪問人数は、インド大学生 20 名、コーディネーター兼通訳 2 名、JICE 担当者 1 名の予定。
- d) 訪問希望日は 11 月 30 日（木）午後。

(1a) のテーマに鑑み、インターナショナルセンターから日本語教員養成課程を有する文芸学部へ訪問団受け入れ可否の問い合わせがあった。問い合わせに対応したのは国際交流センター運営委員の松本である。

松本と、日本語教員養成課程担当の深澤とで協議し、受け入れ可能と回答した。希望日として指定された日時は通常であれば授業日だが、2017 年 11 月 30 日は偶然土曜日時間割だったため、学生に授業を欠席させずに参加させることができた。回答以降、10 月は JICE・インターナショナルセンターから得た情報を踏まえて交流会のプランを立てつつ、参加学生を募る期間となった。

当初は、(1b) に関して日本語教育に関する授業への参加という案が提示されていた。そのため、日本語教員養成課程の登録者が多い日本文学専攻の学生に参加者募集の呼びかけを行い、日本語教師を目指す他学科の学生には個別に声を掛けていた。ところが、10 月下旬になって日本語教育関連の授業参加は必須でないことが判明した。そこで急遽呼びかけの範囲を広げ、学科・専攻間交流も今回の交流会の要素に加えることにした。特に、日本語以外の共通言語となる英語を学んでいる外国語外国文学専攻英語英米文学コース・英語英米文学専攻の学生と、文化資源学的な関心を持ち日本の歴史と文化に詳しい文化・歴史学科の学生に参加を呼びかけた。ただし、周知の時間がほとんどなかったため、声を掛けられたのは松本のゼミ生、および藤井が担当する実習授業を履修していた学生が中心である。

結果的に文芸学部からは 20 名の学生が参加することになった。以下に参加学生

の所属と氏名、2017年度の学年（（ ）内）を示す。（ ）内に☆がある学生は、日本語教員養成課程に登録している学生である。

(2) 参加学生

文学科日本文学専攻

白石 彩 (4 ☆)    中井 知佳 (3 ☆)    加藤 凜 (2 ☆)

坂本 直也 (2 ☆)    櫻井 文音 (2 ☆)    藤倉 要平 (2)

文学科外国語外国文学専攻英語英米文学コース・文学科英語英米文学専攻

児玉 亮介 (3)    福田 樹 (3 ☆)    根岸 遥 (1)    増田 簡 (1)

文化・歴史学科

青木 霞隠 (3)    井澤 伸矢 (3)    中 秀太 (3)    中村 梨穂 (3)

濱 愛美 (3)    山本 文音 (3)    升一 亜海 (3)    松井 泰佑 (3)

村上 遙香 (3)

英語コミュニケーション学科

坂本 海斗 (3 ☆)

10月初旬の時点で提示された情報が乏しく、近大の学生との交流に求めているものが見えてくるまでに時間がかかったため、文芸学部の参加学生が確定したのは11月初旬になってからだった。

## 2.2. 事前準備

(1b) について、11月30日には日本語教育に関わる授業は行われないため、訪問プログラムの柱は校内案内ツアーとディスカッションの2つとなった。前者については、JICE との打ち合わせ後にインターナショナルセンター職員と文芸学部教員の方で大枠を決め、文芸学部生はディスカッションに注力することになった。10月下旬～11月初旬に、教員の話し合いによりディスカッションの大枠を次のようにした。

(3) ディスカッションの大枠

a) 「日本文化」を全体テーマとする。ディスカッションに使う時間は60分程度。

b) 文芸学部生5名とインド学生5名、合計10名のディスカッショングループ

プを4つ作る。各グループには、複数の学科・専攻の文芸学部生が含まれるようにする。

- c) 具体的なディスカッションテーマは、グループごとに文芸学部生が話し合って設定する。

文芸学部生が準備する機会を設けるため、11月7日、14日、21日のアセンブリーアワー（火曜4限）を使って学生に集まってもらうこととした。各日に行ったことは次の通りである。

- (4) 11月7日の会合：初顔合わせ

- a) JENESYS2017、インド訪日団、(3)について説明する。
- b) 4つのディスカッショングループA、B、C、Dを作る（この時点では文芸学部生のみ）。グループメンバーで連絡先を交換する。
- c) グループごとに、ディスカッションテーマについて話し合う。

この時点でインド学生についての情報がほとんど伝えられておらず、彼らの日本語レベルも日本文化の何に興味を持っているかも不明だった。そのため、(4c)に関してはインド学生の状況に応じて柔軟に対応できるようなものを設定する必要があった。次回会合までに、各グループともテーマ案を複数用意すること、また、ディスカッションに必要な画像や物品があればそれらもまとめること、を依頼した。

- (5) 11月14日の会合：ディスカッションテーマの調整

- a) 各グループがテーマ案を発表し、情報を共有する。
- b) ディスカッションに必要な画像や物品を聞き取る。
- c) インド学生19名をグループA～Dに振り分け、学生に関する情報を全員で共有する。

(5a) では、図1のようにキーワードを付箋紙に書き出して壁に貼り、参加者全員が見ながら意見交換できるようにした。(5b) は、購入の必要な物品を聞き出すようにした。JICEから提示された購入予算とその用途には制限があり、学生たちのリクエストに応えられないものもあった。結局、インターナショナルセンターへ手配を依頼して、インド学生へのプレゼントとして(6)を用意することになった。

- (6) [おりがみ、コマ、お手玉、竹とんぼ] × 19名

この日までにインド学生の名簿が届いたので、それを用いて (5c) を行った。グループ分けにあたっては、第一に、日本語レベルの高い学生と低い学生とを組み合わせさせてグループごとの日本語レベルが均等になるように留意した。第二に、文芸学部生が設定したテーマに近い事柄に興味を持つインド学生を配置することに留意した。

#### (7) 11月21日：ディスカッションテーマの調整（予備日）

この日は顔合わせが必要なチームだけが集まり、話し合いを行った。

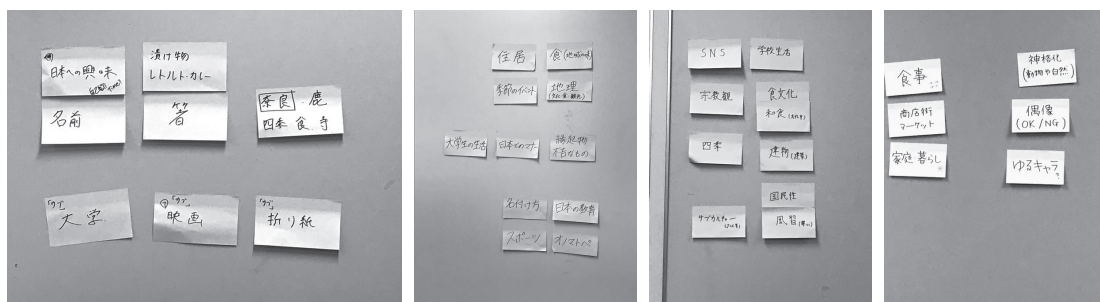


図1 11月14日時点のテーマ。左から順に A, B, C, D グループ。上ほど優先度が高い。

### 3. 交流会当日の様子

交流会の会場には国際学部棟の中規模教室で、一人分の机と椅子とが自由に移動させられる教室を借りた（文芸学部棟にはこうした教室がない）。これにより、一つの教室で4グループが同時進行で交流する会場を設営できた。当日、学生たちはグループごとにインド学生の名前をホワイトボードに書いたり、ノートパソコンを設置したりして、スムーズにディスカッションに入れるように準備していた。

インド訪日団が来場し、全員が席についたところで高宮いづみ文芸学部長によるウェルカムスピーチ、大村吉弘国際交流センター長からの近畿大学概要説明が行われ、早速学生同士の交流が始まった。以下はグループごとの様子である。

Aグループは、インド学生と漢字で名前を書いてみることで、自己紹介をしていた。文芸学部生が漢字の意味を説明しながら、インド学生の名前に漢字をあてていた。互いの言語の違いなどを感じるきっかけとして、漢字という文字を視覚的に使用する意図が感じられた。その後、文芸学部生が持参した折り紙を折りながら、

日本とインドの文化について情報交換をしていた。西ベンガルからの学生は自分の地域について話し、西ベンガルの大学の近くで現地女性が売っていた人形をおみやげとして持参してくれた。

B グループは、事前にそれぞれの学生が日本文化に関するパワーポイント等の資料を日本語と英語どちらにも対応できるように準備しており、資料をもとに丁寧に説明をし、そこから会話につなげていたことが印象的であった。例えば、東京と大阪でのエスカレーターの乗り方の違いから、インドでの地域差について話を広げ、インドでは生活に根付いている文化そのものが地域によって違うことを情報として共有した。あるインド学生は、タマリンドの種子を使用する Pallankuzhi というゲームを文化・歴史学科の研究室に寄贈してくれた。

C グループは、初めにインド学生から、自己紹介と趣味・特に日本に関する興味関心ごと・日本語の学習歴や経験について一人ずつ話をしてもらい、その後に文芸学部生からも軽い自己紹介を行った。その後、インド学生が持参した Ludo と呼ばれる伝統的なボードゲームで遊んだ。また、スマートフォンのアプリケーションとしてリリースされている同様のゲームについても紹介してもらった。他にも、日本のコマに似た遊び道具と日本式のコマを比較し、互いに教え合いながら交流した。また、空手に興味があるという一人のインド学生に対して、文芸学部生の一人がウェブ上の動画を探し出し、二人でディスプレイを見ながら会話を弾ませるという場面もあった。

D グループは、インドの地図を持参した人がいたので、それを見ながら地域による言語や風習の差を解説してもらった。実際にインド国内を旅行したときのエピソードからも、インドという国の言語や文化の多様性を知ることができた。その他にも、インドのボードゲームで遊んだり、けん玉の使い方を文芸学部生がレクチャーして、インド学生にけん玉を体験してもらったりしていた。その後は、他のグループも一緒に廊下の広い空間に出て、日本のコマとインドのコマを使って一緒に遊んでいた。インド学生がインドのコマの回し方をやって見せたがうまくいかず、はじめて回した日本人の学生のほうが上手であったことから、周囲の学生たちが拍手を送っていた。



A グループの様子：漢字で名前を書く、インドの双六をする、折り紙を折る



B グループの様子：資料を使って日本文化を説明、インドの伝統的遊びを学ぶ



C グループの様子：自己紹介をする、Ludo をプレイする



#### D グループの様子：インドの地図に触れる、けん玉で遊ぶ



グループディスカッションの 60 分間が終わると、インド学生の代表からお礼の挨拶が日本語であり、教室での交流会は終了となった。

その後、全員で英語村、そしてアカデミックシアターへ移動して職員の案内で見学し、最後に駐車場でバスに乗り込み次の目的地へ出発するインド学生を文芸学部生が見送ってインド訪日団との交流は全て終了した。

## 4. 文芸学部生たちの反応—事後のアンケート・インタビューから

### 4.1. 文文学専攻・英語コミュニケーション学科

イベント終了後、イベントに参加した日本文学専攻および英語コミュニケーション学科の学生数人を対象に以下の項目でアンケートを採った。

#### (8) アンケート項目

- a) 今回のイベント参加への感想（参加を通じて得られたもの）。
- b) 他学科・専攻の学生との協同作業をどのように進めたか（具体的な方法）。
- c) 他学科・専攻の学生との協同作業についての感想（面白かった点、難しかった点、など）。
- d) 国際交流イベントや、他学科・専攻の学生との連携について、改善が必要だった点。

アンケートの詳細は本稿末尾の資料のとおりである。日本文学専攻・英語コミュニケーションの学生からの回答は J・EC としてある。



まず、(8a) について、ふだん接する機会のないインドの学生と交流することで、文化の違いや、現地の日本語教育事情について知ることができたという意見が多くみられた。

次に (8b) について、教員が設定した打ち合わせの時間以外にも、LINE などのコミュニケーションツールを使うことで、円滑に準備に取り組むことができたという意見が多くみられた。中には、自主的に任意の昼休みを打ち合わせの時間を設けて準備作業にあたった学生もみられた。

(8c) について、他学科・専攻の学生とチームを組むことで、異なった着眼点でアイデアを出しあうことができたという意見がある一方で、初対面となる他学科・専攻の学生との共同作業は、人数の配分や正規の打ち合わせ時間以外で集まろうとする場合に意思疎通を図るのが難しいという意見もみられた（この点に関しては、アイスブレイキング後や LINE による連絡の導入等で最終的には克服されたように考えられる）。

最後に (8d) について、結果的にはイベントが成功したと考える学生が多数であったが、今回のイベントを準備するにあたって浮かび上がった最大の問題点は、受入先であるインターナショナルセンター側からの事前連絡が不確定（訪問団の日本語能力のレベルや、日本に対する興味関心の内容、など）なものであったことである。この点が、学生にとって大きなフラストレーションになった。

#### 4.2. 文学科英語英米文学専攻

英語英米文学専攻からは、1 年次生 2 名、3 年次生 2 名の計 4 名の学生が、インド学生とのディスカッションに参加した。4 名の中から、1 年次生の学生 1 名、3 年次生の学生 1 名の計 2 名にアンケート協力を依頼した。以下アンケートの結果を記す際には、それぞれ学生 E1（英語英米文学専攻 1 年次生）、学生 E3（英語英米文学専攻 3 年次生）と記すこととする。

海外渡航や国際交流の経験があまりない学生にとって、国内にしながらインドの各地からやってきた多様な学生と交流できたことは、ほんの短い時間ではあっても、言語や文化の多様性を直接肌で感じることでできる貴重な経験となったようだ。短時間であったため、あまり踏み込んだ内容のディスカッションをすることは

できなかったが、コマ、折り紙、双六などの日本とインドの遊びを使用した体験型の交流を通して、距離感を縮めることができたようだ。彼らにとって今回の交流が、その場だけの出来事にとどまらず、今後の外国語学習や国際交流活動参加に対するモチベーション向上につながることを期待したい。

次に、今回の協同作業に関する学生の意見に触れておきたい。学生 E1 の場合は、まだ1回生ということもあり、自分の知らない他学科の内容と触れる貴重な機会となったようだ。しかし一方で、それぞれの学生の興味・関心が各自の専門分野に偏ってしまい、イベントのグループワーク全体で考えると統一感のないものとなってしまったという問題点を指摘している。

学生 E3 の場合は、インド学生との協同作業として、インドのボードゲームや日本の独楽に似た遊び道具で遊んだことを挙げている。そして、双方の文化を比較することで、文化の違う部分と、似ている部分を、身をもって体験することができたと述べている。

日本人学生同士のグループとしての統一感にはやや欠けるという問題点が指摘されたものの、異なる学年や専攻の学生が一堂に会し、交流する機会をもてたことは非常に有意義であったと思う。また言語の壁を越えて、体験型の交流を盛り込んだことは、全体としての統一感や一体感を高めることに寄与したのではないかと考える。

最後に、国際交流イベントや、他学科・専攻の学生との連携についての改善点についての学生側の意見を記す。学生 E1 も学生 E3 も、事前情報が不足していたことやイベント主旨の説明が不明瞭であったことを問題点として挙げている。改善策として、学生 E1 は、事前にイベントについての意見交換をすることを提案している。事前に JICE の方から頂いたインド学生の名簿を日本人学生には共有し、インドの遊びを紹介してほしいという日本人学生からの要望を JICE 経由でインド人学生に伝えていただくことができたことは、非常に効果的であったが、やはり数時間の交流では限界があるため、事前に Skype など学生同士の自己紹介や意見交換ができれば、当日の交流をよりスムーズに進めることができたのではないと思う。

学生 E3 は、今回の交流の主旨について先方と当方間で目的の確認と擦り合わせ

が不十分であったことを指摘している。また、日本の文化等を紹介する準備が不足していたことと、今回の交流で多くの時間を伝統的な遊びに使ってしまったことが心残りであると述べている。

英語英米文学専攻の学生たちは、英語という言葉、英米文学や英語圏の文化、英語教育などを専門としているが、全ての学生が必ずしも海外志向が強く、コミュニケーション能力に長けているわけではない。むしろ、英語でゆっくりと文章を読み、それについてしっかりと考えるという内省的な活動をすることのできる学生がそろっているように感じる。短時間の交流や初対面でのコミュニケーションは苦手な学生もあり、その場でSNSやメールなどの連絡先を交換することには戸惑いを感じ、その後の交流につながらなかったことは残念だ。学内でも、日ごろから交換留学生と交流をしたり、英語村でネイティブと会話をしたりすることは可能であるが、日本にいながら、近畿大学の中で、文芸学部の中で、そのような交流ができる仕組みはまだあまり整っていない。海外にいる学生と時間をかけてゆっくりと交流を深めることができるような枠組み作りが必要とされているのかもしれない。

#### 4.3. 文化・歴史学科

文化・歴史学科からは3年次生の学生が9名参加した。所属ゼミはさまざまで、民俗学のゼミが4名、日本中世史のゼミが1名、考古学のゼミが1名、西洋近現代史のゼミが1名、現代文化のゼミが1名、フランス文学のゼミが1名であったが、いずれの学生も文化資源学関連の実習授業に熱心に取り組んでいる人たちであった。文化・歴史学科では、日本・世界の歴史と文化を幅広く学ぶことができるカリキュラムを用意し、古今東西の文化資源を探究して発信する文化資源学という授業群を設けている。今回、インド学生との交流会に参加したのは、自分の専門を明確に意識しつつ、狭い専門にこだわらず、学科内で横断的に文化資源学を学んでいる学生たちであったということになる。

文化・歴史学科においても、参加学生に対して(8)のアンケートをおこなった。

アンケートとして回答を得られたのは3名であったが、この3名以外からも感想を聞いた。感想も含めて集約すると以下のようなになる。

(8a) としては、参加してよかったという感想が多かった。もともと学科の実習

系授業にも意欲的に参加している学生たちであったためか、異文化との交流、自国文化の再発見になったという意見がみられた。また、日本史を専攻する学生にとっては国際交流関係のイベントに参加することは初めてという者もいたが、こうした学生にとっても貴重な体験であったという感想であった。

(8b) 他学科・他専攻の学生との学生とは直接会って話し合う時間を取ることは難しかったといい、LINE を用いて作業を進めたという。LINE を使用することで順調に作業は進んだようである。

(8c) としてはさまざまな意見がみられた。文化・歴史学科の中でも、歴史関係のゼミに所属して歴史的な関心が強い学生と、現代文化のゼミに所属して現代の文化に関心が強い学生がいる。他学科・他専攻の学生と話し合うことは、自分が考え付かなかった観点からの提案が出されたといい、大いに刺激になったようである。文化・歴史学科からは具体的におもしろそうな事例を提示することもできたようである。

(8d) としては、情報不足、準備時間不足などがあげられた。また、お互いに知らない学生が集まって共同作業をおこなうため、最初にアイスブレイキングの時間を用意するなどがあってもよいのではないか、という意見もみられた。

## 5. おわりに——今後の文芸学部国際交流イベントに向けて

4 や資料から、今回の交流会の主な成果として次の2点が挙げられる。

(9) 学内で国際交流イベントを行ったことにより、国際交流にもともと関心のある学生はもとより、海外渡航経験のない学生や、専門の都合上頻繁に海外の生の情報に接するわけではない学生に向けても、異文化交流や自文化の再発見などの機会を提供できた。

(10) 異なる学科や専攻の学生を交えたグループを作ることで、文芸学部生同士の交流を通じて知的刺激を得られる機会を提供できた。

一方課題も残る。今回の交流会の最も大きな問題点は、多くの学生から指摘があったとおり、終始情報不足で準備期間も十分ではなかったことである。情報不足から教員がイベント趣旨の設定に迷い、その状態で短期間に学生たちに事前準備をさせることになってしまった。今回に関しては文芸学部生たちが主体的に行動して

くれたために結果的に有意義な機会となったが、情報不足と準備時間不足は学生の大きなフラストレーションにつながる。今回のようなスタイルの国際交流イベント開催にあたっては、教職員側が事前に入念な情報収集を行い、イベント趣旨を十分に吟味する必要がある。関係機関等との連携のあり方も含め、今後の課題である。

いずれにせよ、文芸学部生たちの積極的な参加に支えられて交流会は成功に終わった。時間も情報も不足している中でさまざまなアイデアを出し工夫を凝らしてくれた彼らに深く感謝したい。

### 資料：アンケート・インタビューの結果

※ J・EC = 日本文学専攻・英語コミュニケーション学科、E = 英語英米文学専攻／英語英米文学コース、CH = 文化・歴史学科。数字は学年。

※ 学生の書いたものを原文のまま掲載する。そのため、表記の不統一や事実誤認の内容が含まれている場合がある。

(8a) 今回のイベント参加への感想（参加を通じて得られたもの）

- ・ インドという国がほんの少しではあるが、知れたことが大きいです。また今回のイベントの機会で、今まで知らなかったことを知るために、調べるや聞く、考えるきっかけになりました。(J・EC2)
- ・ インドの人達と普段交流することは滅多にないので、現地の日本語教育事情等、貴重な話を聞くことができました。(J・EC3)
- ・ 日常生活をしている中で、なかなかインドの文化に触れる機会がないので、参加することが出来て良かったです。交流のために日本の文化についても調べ直すことで、よりいろいろなことを知ることができました。また、他学科の学生と交流することもできて良かったです。(J・EC2)
- ・ 同年代のインド人と交流していい刺激になった。また文化の違いを考えたり、自国のことを見直すきっかけにもなった。(J・EC2)
- ・ 今回のイベントを通じて、様々な状況を考えて教材を準備する大切さを学びました。プロジェクトについて説明を受けた段階では、訪問団の具体的な日本語のレベルが分からなかったため、最初は英語と日本語で書かれたPPT〔パワーポイント—筆者注〕と英語のスクリプトを用意しました。結局、グループの半



数の訪問団の日本語レベルが高く、説明は簡単な日本語で行い、グループの中で日本語に精通している人が分からない人に通訳をするという形になりました。私の所属したグループでは、訪問団側が日本語での説明を求めたため、英語のSCRIPTはあまり必要ありませんでした。今回は相手側の要望に応じて、あえて準備していた英語はあまり使用しませんでした。相手側のレベルや要望、学びやすさを考えて、相手の立場に立って教材の準備をすることの大切さを改めて実感しました。(J・EC3)

- ・ 海外渡航経験のない私は、外国の方と触れ合う機会が英語科目のネイティブ教諭や街中の東アジア系の旅行客に限られていました。今回のイベントで短い時間でしたが、インドからの同年代の学生の方々と触れ合うことは、自分から海外に出ることで初めて世界に繋がることが出来ると思っていた自分にとって新鮮なことや発見にあふれていました。(E1)
- ・ 日本語を学ぶことに対するモチベーションをもった学生がいることを感じられた。日本語のレベル等は人によってまちまちで、中には英語で会話する必要があると思えるほどの学生もいた。また、単純に日本の学生と交流がしたい、日本の文化に興味がある（もしくは、日本文化の作品などが好きである）といった様子の方も見受けられた。(E3)
- ・ 文化や言語のほとんど共有されている日本と違い、多民族・多言語・多宗教のインドの学生の方々は異文化を持つ相手とコミュニケーションをとることに慣れているようでした。互いの文化の差異を認め、尊重しながら、そしてそれらを表現し、相手に伝えながら相互理解を深めて行くそのコミュニケーション方法は、私たちが国内にいながらにしては経験することが殆どないように思えます。一度この様な方法を体験することで、次に同じ様な機会に一定の自信を持って能動的にコミュニケーションを取れるのではないかと感じます。(E1)
- ・ お互いの文化を初めて体験する場合、相互理解のためには会話の情報以上に、五感で感じられるものを利用することが有効だと実感しました。中でもその国の「こどもの遊び（日本では折り紙、インドのすごろくなどがイベントで利用されました）」は、それぞれの文化的な背景を持ち、子供でも出来るくらいに簡単であるため、短時間の交流においても相互の異文化理解を深める一助とな

りました。(E1)

- ・ 始まりこそよそよそしくあったものの、少しの時間ではあったが、話し合い、文化や遊び等を紹介し合うなかで、距離が縮まったように感じた。主観ではあるが、双方が楽しく交流できたことは、異文化理解・異文化交流ができていると感じ、嬉しく思った。(E3)
- ・ 同年代の学生同士でも、日常生活で利用する SNS が違い（日本人学生は LINE・Twitter・Instagram が主 インド人学生は Facebook・Messenger が主）イベント後に連絡を取り合うことが困難でした。しかし、e-mail はどちらの学生も利用しているはずですが e-mail アドレスを交換しなかったことは後悔の残る部分です。(E1)
- ・ 当たり前だと感じている日本の技術や年間行事といった自国文化の特殊性を再発見することができる素敵な機会でした。インド訪日団の方々だけでなく、他学科・他専攻の学生との交流からも自身の視野を広げることが出来たので、とてもためになりました。(CH3)
- ・ 普段、異文化の方と接する機会はなかなかないので、貴重な体験だった。イベントの事前準備をするにしても、相手の文化を考慮し、食べ物などの話を考えたりするのは大変でもあり、おもしろくもあった。事前に英文を用意していたが、当日インドの学生の方々に会くと、日本語が上手な方が多くて驚いた。イベントを通じて、様々な方と交流することで、自分のなかの“普通”がそうではなくなり、視野を広げることができると感じた。(CH3)
- ・ 私自身が、国際交流関係のイベントに参加したのが初だったので、とても新鮮で楽しめました。また、今回はインドの方との交流ということで普段あまり触れ合うことのない文化を学んだり出来たことがとても素晴らしかったです。(CH3)

(8b) 他学科・専攻の学生との協同作業をどのように進めたか（具体的な方法）

- ・ 自分たちが発表する議題を決めて、複数の議題の中で自分が得意なものを選ぶ。そして各議題を 2.3 人で内容を詰めていきました。(J・EC2)
- ・ 話し合いの時間（火曜 4 限）を設けて頂いたので、その時間でそれぞれが意見

を出し合ってどのようなトピックで話すのか、日本の文化（折り紙等）を体験してもらうかを決めました。(J・EC3)

- ・ 私は火曜日の4限に授業が入ってしまっていたので、主にグループラインを通じて作業を進めていました。4限に話し合った内容を共有してもらい、次の話し合いまでに自分の担当部分をラインに挙げていました。(J・EC2)
- ・ ラインで連絡しながら各々必要な情報を集めた。(J・EC2)
- ・ 授業日程も全く異なる学生が集まっていたので、毎回○曜日の昼休みに集まるように集まる日を固定しおき、その時間に参加できる人だけ参加する形をとりました。また、来られない日はラインで連絡を入れ、参加した人がその日の活動内容を報告し、次回までに行うタスクをラインにアップして情報の共有をしました。直接全員が同じ時間に集まることが難しい場合でも、タスクとその締め切りをラインで伝達し、タスクが完成した人からラインにアップすることで、各々の進行状況がよく分かりました。当日まで全員が集まることが難しかったため、当日は集合時間の2時間以上前に集まり、全員のPPTをまとめる作業を行ったり、それぞれの発表の最終的な打ち合わせ、PPTの改善点について話し合ったりしました。(J・EC3)
- ・ イベントの担当教授に設定していただいた週に一度の90分ほど集まる機会イベントのグループワークに何をするのかを話し合うことがメインでした。他にもLINEでグループ（複数人で出来るチャット）を作り、集まりで話しきれなかったことなどを相談しました(E1)
- ・ 話し合いで週ごとに行う作業を決め、その後LINEを通じて連絡を取り合いながら、作業の進具合や疑問点について情報交換を行い進めていきました。(例：LINEのノート機能を使用して、「成人式」「住居」など調べた項目を記事のようにまとめ、情報を共有)(CH3)
- ・ それぞれバラバラの授業を取っているため、直接話し合える時間が少なかったため、何人かで直接話し合えたときには、その日なにを話して何を決めたかなど、こまめに他のメンバーにも連絡を取るようにはしていた。どの文化について議論するか決めるときには、文化・歴史学科や文学科のメンバーがまずおもしろそうな意見を出し、文章を英語にする際には英語コミュニケーション学科

のメンバーに見てもらったりとそれぞれの知識を活かしながら取り組んだ。

(CH3)

- ・ 今回はLINEを使いました。同じ学科の学生もいましたが、他学科の子とはやはりあまり直接会ってやり取りするのは難しいので、LINEを使ってやり取りすることで班の中でやりたいことなどをまとめることが出来ました。(CH3)

(8c) 他学科・専攻の学生との協同作業についての感想（面白かった点、難しかった点、など）

- ・ 各専攻によって着目する点が異なっていたのが面白かったです。文歴なら風土や、宗教について着目したりしました。一方で、日文ならもう少し異なった事柄に着目したということがありました。難しかった点としては専攻によって生活リズムが異なるため、納得いくまで内容が詰め切れなかった点があります。

(J・EC2)

- ・ 他学科で初対面ということもあって、同じ学科の人たちと比べるとコミュニケーションが取りにくい部分も感じました。人数の関係もありますがバランス良く構成されるのが理想だと考えます。あくまでも目的はインドの人達との異文化交流なので、日本のグループ間では出来るだけコミュニケーションの取りやすい環境で臨む方が良いかなと感じました。(J・EC3)
- ・ 他学科の学生と話すことがあまりないので貴重な体験でした。話してみると学科が違うだけで日本について関心がある部分や知識の深い部分がさまざまで面白いなと思いました。(J・EC2)
- ・ 他学科の人とやることで様々なアイデアが出て面白かった。(J・EC2)
- ・ 面白かった点としては、やはり専攻の違う学生が集まっているので、その人の専門的な話を盛り込んだり、自分では思いつかないアイデアを交換したりできたことです。私は日本語教員養成課程に在籍しているため、「やさしい日本語」の伝え方についてグループのメンバーに説明したりしました。また文化歴史学科の学生からは、日本文化について面白いトピックを教えてもらい、相互に助け合いながら活動を進めることができたと考えています。難しかった点は、当日まで全員が一度に集まる機会がなかなか取れなかったことです。ですが、情報

の共有はラインで毎週行っていたため、作業の進行については特に困難は感じませんでした。(J・EC3)

- ・ 共同作業をした学生は当時、2・3回生の方が殆どで、専門知識も豊富でインドの方々と交流したい内容がより具体的であり、自分の知らない他学科の内容と触れる貴重な機会となりました。それぞれが一定以上の専門知識を持つ一方で、各人のイベントでやりたいことが自分の専門に偏り、当日それぞれがそれぞれの興味・関心・専門の事柄を話題にし、イベントのグループワーク全体で考えると統一感のないものと感じられる面もありました。(E1)
- ・ 私は文化・歴史学科ということもあり、歴史的な視点に固まってしまうがちでした。しかし、留学生との交流を積極的に行っている方から、「現代の学生の様子や割り勘といった支払い文化も興味深いものだ！」という話を聞き今まで以上に生活における身近な文化に目を向けてみようという意識が芽生えました。さまざまな視点をもった学生で作業にあたったことで、とてもいい刺激を受けたと思います。他学科・他専攻の学生同士ということもあり、話し合いへの全員参加は難しかったのですが、その分 LINE での連絡を全員が細めに行っていたので順調に作業が進みました。(CH3)
- ・ 文芸学部は、さまざまな専攻があるので、その特徴を活かせたと思う。異文化の方に伝えるための言語や日本独自の文化など、各々が持っている知識をうまく共有できた。(CH3)
- ・ 同じ学科の子もいたので、考え方が似てる部分があったり発想が一緒の部分も一部あったのですが、他学科・他専攻の子とは違う発想だったので、違う視点などを得ることが出来たのでその点に関してはよかったと思います。(CH3)

(8d) 国際交流イベントや、他学科・専攻の学生との連携について、改善が必要だと思った点

- ・ 上記のこと〔(8c) 1 点目―筆者注〕が少し難点であった以外特にありません。(J・EC2)
- ・ 改善点としては(3)〔(8c) 2 点目―筆者注〕で前述した通り、人数の関係がありますがグループ構成はコミュニケーションがよりスムーズに取れるようなもの



のが理想だと考えます。しかし、決して今回が大きなコミュニケーションの問題があった訳ではなく敢えて改善点をあげるならという前提での話になります。(J・EC)

- ・ やはり学科、または学年が違くと火曜4限以外で集まるのが難しく直接会って話し合う時間をもっとたくさん設けられたら良かったなと思いました。また、直前になるまで訪問してくれた方々の日本語のレベルや、日本についてどんなことに興味を持っているのかがわからず、ゲームなどを考えるのが難しかったです。(J・EC2)
- ・ 交流会に向けて話していた内容と実際に行ったことが変わったので、(結果的には成功したが)訪問団の具体的な情報がもっと分かってたら初めからアプローチの仕方を変えられてたかなと思う。(J・EC2)
- ・ 今回のイベントで特に改善が必要なことは、相手側の情報を事前に入手しておくことだと思います。国際学部からの依頼を受けて行われた企画でしたが、国際学部側の担当者の方があまり情報を把握しておらず、具体的にどのような活動を提供すればいいのか依頼された側の私たちや日文の先生方が分からない状況があったと思います〔この学生は、インターナショナルセンターと国際学部とを混同している一筆者注〕。特に今回のイベントでは、学習者側のレベルが分かりづらかったため、どの程度の難しさの日本語を使えばいいのか、どのような分野に興味があるのかという点が分からず、レベルや内容を絞り込むのが難しかったです。ですがこの問題についてかえって、グループで話し合うきっかけにもつながったので最終的にはよかったと感じています。今後このようなイベントがある場合は、学習者側の日本語学習歴、日本語のレベルなどが詳しく分かれば、よりその人に合った対応ができると思います。また近畿大学で行われた日本と韓国にルーツを持つ子どもとの交流会では、事前にビデオレターでの交流を行っていたため、相手の日本語のレベルがある程度把握でき、なおかつ、来日前にお互いのことを知っているため、当日スムーズに会話ができるということがありました。今回の学習者は成人されている方が多かったため、特に初対面でもお互いに友好的に会話をすることができましたが、相手が大学生以下の場合、事前にビデオレターで交流をしておけば、お互い安心して臨む

ことができると思います。(J・EC3)

- ・ 強いて挙げるのであれば、当初、イベントの詳細が誰にも分からなかった点がありますが、イベント担当の教授の先生、大学の事務方の担当の方、皆様が学生の準備に必要な環境や情報、資料などを迅速に豊富に用意してくださり、私たちは自分たちのやりたいことをスムーズに実現することができました。ありがとうございました。もし可能であれば、交流イベント当日以前にお互いのイベントでやりたい事の意見交換などが出来れば、より互いの満足感が高まるものになるのではないかと思います。(E1)
- ・ 前情報が少なく、準備をするにも何を用意すれば良いのか少々判断に困った。交流の目的に関して、一番初めに伝えられた内容と、後半で伝えられた内容で差異があったことに困惑した。前日・当日になったとしてもその目的が不明瞭だったように思う。(E3)
- ・ 今回の交流の主旨が曖昧であったように感じる。もう少し、先方と当方間で目的の確認と擦り合わせをし、ハッキリした情報があるとより有意義で実りある交流ができたように思う。また、これは個人的な問題であるが、日本の文化等を紹介する準備が不足していたことと、今回の交流で多くの時間を伝統的な遊びに使ってしまったことが心残りである。なানাあになるのではなく、もう少し積極的に、文化の紹介や歴史についての会話等を含めた知的な交流が出来るようになったと感じる。(E3)
- ・ グループで別れた直後はお互いに緊張があり、少し堅い状態で交流が進んでいった部分がありました。単に自己紹介を行うのではなく、初めは軽いゲームなどアイスブレイキングの時間を用意するのも良いと思います。(CH3)
- ・ 国際交流イベントは、大学にとっても大切なイベントなはずなのに、情報不足であったりと大学側でも連携があまり取れていないのではないかという場面がいくつかあったので改善すべきだと感じた。(CH3)
- ・ イベントそのものは素晴らしいものでしたが、他学科・他専攻との連携に関しては少し難しい点がありました。一つは、やはり知らない学生といきなり何かを考え、作業をすることが難しいと感じました。また、イベントまでの期間が少し短いと思いました。そして、全体で集まる回数が少なく、全体のまとまり

が少し弱く感じました。それはインドの方のまとまりの強さを感じたことで  
う感じました。(CH3)